

# 中国の幼児教育・保育

Kindergarten and Nursery School Education in China

浅野 房雄  
Fusao ASANO

中山 千章  
Chiaki NAKAYAMA

足立 広美  
Hiromi ADACHI

## 1 はじめに

われわれ3名は、平成18年10月13日から16日までの4日間、中国上海・華東師範大学において開催された第27回国際幼児教育学会上海大会に研究発表するために中国を訪問した。大会における中国側の講演や研究発表、中国の研究者や保育者との交流、それに2つの幼稚園（日本で言う幼稚園）の視察を通して、中国の幼児教育・保育の実態を学んだ。ここにその一部を報告する。

## 2 幼稚園視察報告

### (1) 上海市・長寧実験幼稚園

上海市内の幼稚園（日本の幼稚園と保育園を一緒にしたような形態）の視察は大会の3日目にあたる、10月16日（月）に実施された。浅野先生と私が訪問した幼稚園は華東師範大学からバスで15分程しか離れていない、長寧実験幼稚園であった。

幼稚園に到着すると間もなく、園長らしき人が出てきて歓迎の挨拶があった。幼稚園といっても3階建ての大きなビルで、さすが高層ビル群に囲まれた上海の中の幼稚園といった雰囲気があった。

幼稚園の広い通路に入って、保険室やその他いろいろな掲示や飾り物を見ながら進んでいくと、最初に案内された部屋は3歳児のクラスであった。子どもたちは数の勉強をしているようであった。子どもたちはよく教育されているのか、私たちが多人数でクラスルームに入っていても、きょろきょろして私たちを見ようとする子が皆無であったのはなんか不思議な感じであった。どちらかというと、日本的な感覚では、あまり子どもらしくないのである。

3歳児のクラスを見た後、園庭に案内された。4、5歳児と思われる子どもたちが日本のテレビアニメ（確か、ちびまる子ちゃんに出てくる「踊るポンポコリン」）の歌にあわせて踊ったりしていた。園庭の感じは、幼稚園の園庭というよりは、まるで日本の公園のようで木があちこちに植えてあり一面芝生で覆われていて、とてもきれいであった。が、子どもたちが活動する場所は芝生でも土でもなく、コンクリートで固められていた。不思議に思っていたので、最後におこなわれた延長およびスタッフとの質疑応答の時間に、なぜ園庭がなぜ土でないのかと尋ねると、「上海は雨だと園庭がぐちゃぐちゃになり、子どもたちが汚れるから」という返答であった。

園庭を見学した後、2歳児クラスの建物を視察した。一見すると、日本と園児とあまり変わらない様子なのだが、日本のように直接床に座っている子どもは一人もなく、誰もが椅子に座っていた。また隣の部屋には小さなベッドがたくさん並んでいた。中国は畳文化ではないからだろうかと思ったりする。

2歳児の子供たちも、やはり、年上の子どもたち同様大人しく、静かにしているので本当に不思議な感じがした。普段の先生方の教育によるものなのか、それとも上海を代表するような幼稚園なので、見学者が常に多いため、子どもたちは見学者に対して慣れてしまっていて関心を示さない

のだろうか。周囲にいた数人の案内係の中国人にその理由を聞いてみたのだが、「そうですか」とか「日本の子どもは見学者が来ると騒がしいですか。」とかの返事で、文化的な違いからくるものか、結局のところ分からなかった。

その他、4歳児、5歳児のクラスも観察した。4歳児のクラスで英語教育をしていたのが興味深かった。先生はアメリカ人で、上手に子どもたちの関心を思い切り惹きつけるように授業を行っていた。普通の幼稚園では中国人の先生が英語を教えるということだが、ここの幼稚園ではアメリカ人の先生が教えているところから考えても、レベル的に非常に高い幼稚園であると思われた。中国の幼稚園では、英語もきちんとしたカリキュラムにそって教育が実施されるとのことであった。

5歳児のクラスには、中国のいろいろな民族の特徴を表す写真や絵、展示物が飾ってあった。たくさんの民族の絵のなかでも、漢族の絵が大きく描かれており、他の民族の2倍以上の大きさであった。その大きさに何か特別な意味があるのかと思い、隣にいた中国人に、冗談交じりに、やはり、漢族の絵は他よりは大きいですねと話しかけたら、「ええっ、そうですね」と笑いながらの返答であった。

日本の幼稚園・保育園と比べて、一般的な感想は、

- ①子どもたちが、あまり私たち見学者に対し関心をほとんど示さないこと。
- ②勉強時間は日本の私立幼稚園などとあまり違いはないと思うのだが（園長およびスタッフの話から判断して）、生活時間とか遊びのような時間でも勉強に関するような課題的活動が多いこと。
- ③クラスの担任は複数で、必ず2人はいるとのことであった。一人が子どもたちにいろいろと指示をして、もう一人の先生は子どもたちがその指示に従って行動するかどうかを確認したり、電子メールで親達と連絡をとったりしているとのこと。
- ④各部屋にビデオカメラが設置してあり、部屋の様子が幼稚園の関係者のみならずインターネットを通じて子どもがいる各家庭（パスワードが必要）からもアクセスできるようになっていること。
- ⑤一クラスの人数が最大で25名であること。
- ⑥男の先生がないので、尋ねたところ、幼稚園の先生は（ここの園だけかもしれないが）、女性だけだとのこと。
- ⑦園児一人当たりが幼稚園に払う金額は、おおよそ1,000元（日本円換算で1万7千円ほど）とのことであった。いくら両祖父祖母、両親という6つのポケットを持った小皇帝とはいえ、あまりの金額の高さに驚いてしまったこと（なぜなら上海では一般労働者の給与が1,000元ぐらいと、中国人学生から聞いていたので）。

⑧子どもたちが自分の家族と一緒に写した写真がどこのクラスルームにもたくさん貼ってあったこと（日本では園の活動を貼った写真が多く、写真館で撮ってきたような写真を貼っておく幼稚園や保育園はないと思うのだが。こんなところも文化の違いから来るのだろうかと思ってしまう。）等であった。

今回訪問した幼稚園はすばらしい幼稚園のひとつであったようだが、私たちが学ぶべきことは多々あったと思える。特にインターネットを利用して、各家庭から子どもの様子を見ることができたり、すべての連絡はEメールを通して行なったりしていることなど。日本でも、もちろん、同じようなことをしている幼稚園や保育園はあるとは聞いているが、実際に自分の目で見たのは初めてだった。それから、複数担任制も一人ひとりの子どもをしっかりと見て、育てるということを考えると、園にとっては経済的な問題はあるだろうが、十分考慮に値する方法ではないかと思われる。

今回視察した幼稚園は2歳児から預かっているのので、0歳児や1歳児の保育の様子等は全く分からなかった。出来れば、0歳児から預かる託児所もしくは幼稚園のことや、経済的に豊かでない人々が子どもを預けている幼稚園なども視察したいものである。

## （2）上海市実験幼稚園

10月16日（大会3日目）に上海市内の幼稚園視察が行なわれた。中国は日本の幼稚園・保育所のように管轄が分かれておらず、どこの幼稚園も幼保一元の役割を果たしている。私は4つの視察場所のうち上海市実験幼稚園を訪問した。この幼稚園は、0歳児から6歳児までの幼児を預かる施設で、上海市民であれば誰でも入園できる施設である。しかし未満児は週3回しか保育を受けられないことが特徴的であった。

幼稚園ではまず30分程度の自由見学が行なわれた。私は最初に5歳児クラスを見学した。日本では机と椅子が幼児一人に与えられて様々な活動が行われているが、この幼稚園では、全クラスが大事な話をする時（出席確認・朝のミーティングなど）机がなく、椅子に幼児が座って教諭との顔合わせを行っていた。机がないことで教諭と幼児との距離が近く、教諭との信頼関係がより深まるのではないかと感じた。

また出席確認での一コマであるが、日本では欠席した幼児に対して、園児が「おやすみです」という程度である。しかしこの幼稚園では欠席した幼児に対し、架空の「おてて電話」で欠席の幼児との会話を楽しんでいた。架空なので実際に欠席の幼児とは話していないが、話の内容は以下の通りである。

「今日はどうしてお休みなの？」（園児たち）

「風邪でおやすみなの」（欠席した幼児）

「早く元気になって幼稚園にきてね」(園児たち)という会話であった。

このような病気で休んでいる幼児をみんなで気遣う姿に感銘を受けた。そしてこの気遣いは病気で休んでいる幼児への心配・いたわりの心を育てることができると確信すると同時に、教育・保育では、常に幼児への活動内容についての意義を考えることが重要であると感じた。

また3,4歳児ではお絵かきの時間に遭遇した。お絵かきではお友達の髪型をテーマに活動がなされていた。この活動では日本の幼稚園と同様、先生が前に出て、髪の色、髪型を説明し、幼児がそれを見て描くというスタイルであった。

未満児クラスは登園していなかったが、部屋を視察すると、一人一人にベットが用意され、同じアジアでも日本のように床で午睡する習慣がないことを知った。その他、幼稚園の施設では30台ほどのコンピューター室などが完備されており、幼児を最高の環境で育てようとする貴園・保護者の指針を強く感じた。しかし保育料が1200元(19400円)で非常に高く、中国の格差社会の現状を感じた瞬間でもあった。普通の中国人の月給が1000元(17000円)程度であるが、この幼稚園の保育料はこの平均月給を越えていた。近年日本も格差社会といわれるようになったが、このような理由から中国に比べ、日本の幼児教育は平等性に関して恵まれている点が多くあるように感じた。

また中国は北京語が共通語として使用されているため、自分の住んでいる地域の言葉を理解できない子どもたちが増加しつつあるとされている。そこで幼稚園の活動内容に上海の言葉・伝統を守るための上海語での手遊びを取り入れていた。近年の日本においても伝統文化が受け継がれない状況下にあるが、伝統を大切にす精神において見習うべき点であると感じた。

このように幼稚園を視察して様々学ぶべき点があった。同時に子どもの成長を願う心とは、国境の壁を越えて、人種・性別関係なく注がれていくべきであると感じた。日本の様々な幼児への環境や少子化社会に耐えうるべく、私自身もその精神を大事に日々研鑽していきたい。

### 3 中国の幼児教育・保育の実情

#### (1) 制度

中国の就学前教育・保育は、0～3歳までは国の衛生部門の所管である「託児所」が保育し、3～6歳は教育部門所管の「幼稚園」が保育・教育をしている。託児所はわが国の保育所、幼稚園は幼稚園に相当するが、中国では年齢によって就学前教育・保育が分けられるので、わが国のように3歳以上の幼児が幼稚園に通うか、保育所に通うかの選択はない。

託児所は母親の職場である企業、機関や地域社会(郷や村など)に設置されている。託児所は単独で設置されている場合もあるが、幼稚園に隣接、併設されていたりする。幼稚園は託児所同様に職場や地域に設置されているが、政府立の幼稚園も数は少ないがある。最近では私立の幼稚園が設立され、その数が増えているとのことである。私立幼稚園はバイリンガル教育を取り入れる

などユニークな保育を行っているところが多いとのことである。

託児所・幼稚園はともに全日制（日託，家庭から通園），寄宿制（月～金を寄宿舎で過す）をとっている。全日制の保育時間は早朝から夕方まで，10時間前後で食事とおやつ，それに昼寝が日課に入っている。寄宿制は「全託」といわれ，母親の労役を守るためにとられてきた保育制度であるが子どもの数も減り，農村出身のベビーシッターの普及や母子関係を重視する育児観も海外から入ってきて，漸減の傾向にある。また，地域のニーズに応じて半日制や隔日制，それに季節制の保育を実施しているところもある。さらに，就学前1年の幼児クラブ（学前班）を小学校に併設して教育・保育をしている。

幼稚園の外部評価がなされるようになり，評価が4段階でなされ，評価に応じて補助金が交付されるようなシステムが導入されている。

## （2）保育者

託児所における衛生，生活面の世話と指導をする職種は保育員と呼ばれ，衛生関係の専門教育を受けた人が従事することになっているが，まだ無資格の女性が担当しているところが少なくない。幼稚園の教師は教養員と呼ばれ，幼児師範学校（中等師範学校の種類）卒の学歴を必要とする。師範大学本科（4年制）卒業者は幼稚園の教養員になるというより幼児師範学校の教師や教育行政部門の管理者などになることが多い。なお，保育員は待遇面で教養員より低く位置けられている。

託児所の保育員の配置は0歳～1歳6か月児クラスで保育員1人に対し，乳児4～3人，2歳児クラスでは保育員1人に対し，乳児6～7人，である。一方，幼稚園ではクラスの人数は3歳児クラス20～25人，4歳児クラス26～30人，5歳児クラス31～35人，各クラスに教育を担当する教養員2～2.5人，生活面の世話をする保育員1人が配置されている。

## （3）就園状況

中国における幼稚園数は1999年現在，約18万1千園，そこに2,326万人が在園している。ただ，幼稚園の数は1998年より減少し始めているとのことである。園児数も1995年以降減少している。これは一人っ子政策に伴う出生率の減少によると考えられている。ところで，上海など大きな都市ではほとんどの幼児が幼稚園に通園しているとのことであるが，中国の国は大きなこともあり，都市と地方・農村では就園率にも大きな差がある。都市部の就園率約90%に対し，地方・農村では約50%の就園率とのことである。

## （4）教育・保育内容

中国の幼児教育は旧ソビエトの保育理論，心理学，教育学，生理学の影響のもとに，発達を促

すための教科中心、知育中心の教育が行われていた。1981年にわが国の幼稚園教育要領に相当する「幼稚園教育要綱」が公布され、遊びを重視する方向が示されたが、なお、教師中心による文字や計算、音楽や美術の教える保育がなされてきた。その後、「幼稚園工作規程」が1996年に改定され、2001年には「幼稚園教育指導綱要」が制定され、遊びの重視の流れの中でコーナー保育や自由遊びの取り入れ、さらには発達を考慮し、興味に即して活動する大切さが強調され、かつて旧ソビエトから学んだ理論を超え、中国独自の幼児教育を目指しているのが現状である。しかし、上海市の長寧実験幼稚園の今回の視察では、遊びを中心とする幼児教育への転換への姿は認められるが、まだまだ教師中心、教師主導、一斉保育、設定保育の教える保育をしているとの印象を持った。また、政府の方針で地域の特性に応じた教育を目指すことで、柔軟性や多様性を認めることも強調されている。そのこともあり最近では、モンテッソーリ教育など諸外国の保育理論や保育方法が取り入れられ、実践されているとのことである。

#### 4 おわりに

中国における幼児教育・保育の実践の場であるモデル的な幼稚園は建物や設備もすばらしいものであった。そこで教育・保育している保育者の生き生きした姿と真摯な態度にも触れ、子どもを育む教育・保育がそこにあることを実感した。中国という国は大きいこともあり、地域差が著しく、全体的にはまだまだ未発展なところを感じるが、中国という国には子どもを大事にし、教育を大事に考える思想があり、さらには外国の進んだところを取り入れるエネルギーも旺盛なので、中国の幼児教育・保育は今後さらに発展していくものと考えられる。